

殺虫剤スピノサド（スピノエース™ 顆粒水和剤）の

3種のカブリダニ天敵に対する影響

○中村元太 兼次克也 （ダウ・ケミカル日本株式会社 ダウ・アグロサイエンス事業部門）

土壌放線菌サッカロポリスポラ スピノサが産生する殺虫活性物質スピノサドを有効成分とするスピノエース顆粒水和剤は、主に蔬菜、園芸分野のチョウ目及びアザミウマ目害虫の防除剤として普及してきた。特に天然物由来の薬剤であることから特別栽培での使用において化学農薬としてカウントされないため、この分野での普及が進んでいる。また、同一場面では天敵昆虫も多く使用されているため、それらに対する影響についての評価が求められている。演者らはこれまでに市販天敵昆虫に対する影響、及びチリカブリダニに対するスピノエース顆粒水和剤の影響について評価し報告した。今回は *Amblyseius* 属 3種のカブリダニ（ククメリスカブリダニ、ミヤコカブリダニ、スワルスキーカブリダニ）について影響を調べたので報告する。

評価は各種カブリダニ成虫に対する濃度別試験及び残効試験を用いて行った。濃度別試験ではスピノエース顆粒水和剤をナス葉に 50ppm(実用濃度)、25ppm、12.5ppm の濃度で処理した後、各種カブリダニ雌成虫を放飼し影響を調べた。残効性試験ではポット植えのナスに実用濃度で処理した後、経時的に処理葉を採取しカブリダニ雌成虫を放飼し影響を調べた。更に産卵数、孵化した若虫数を調べることによって次世代への影響についても評価した。これらの試験結果から、スピノエース顆粒水和剤はククメリスカブリダニ及びミヤコカブリダニ成虫に対して影響は少なく次世代への影響も観察されなかった。これに対し、スワルスキーカブリダニでは実用濃度で影響が認められた。更に処理直後及び1日後に放飼した場合、次世代に対する影響が観察された。スワルスキーカブリダニに対しては、影響を最小限にするための散布タイミング、散布方法などの検討が必要と思われる。